

会得した真理を実践する空手道

詩を悟る

※詩＝真理・まこと

第六回 無心＝無意識の力

森俊博(もり・としひろ)
プロフィール

昭和25年、宮城県亘理町出身。昭和48年東北学院大学(経済学部)卒業。第4回全空連全日本空手道選手権大会優勝(昭和50年)。第21回JKA全国大会(昭和53年)、第23回大会優勝(昭和55年)。第3回IAKF世界空手道選手権優勝(昭和55年)。師範、総本部理事、国際理事、政策委員。

私が好きな熊谷守一の絵に「山形風景」という作品があります。晩年にこれ以上単純化



守一の「陽のなくなった日」を見るため、岡山県の大原美術館に行くなど、芸術に対して造詣の深い森氏(前列中央)。

しようがないという極限まで単純化し、きつと線でかこまれ、誰もが熊谷守一の絵だとわかるきつかけとなった絵です。

守一が絵を描けなくなつてから、描き出した始めた絵で、セザンヌの絵の如く全体のバランスが取れており、「無心」に表現された絵です。

自分の描き方を創出することも困難なことです。ですが、でき上がった描き方を破棄し、新しい独特な描き方を作り出すことは、もつとも容易ならざる技ではないでしょうか？ 守一は「無心」に徹する事で成し遂げたのです。

また晩年の書は、良寛以上の書ではないかと言われております。「絵」にも「字」にも全く邪念がなく、自然そのもののように素直で、あるがままで、見ているだけで心が洗われる気がします。

私たちが「空手」を通して「無心の境地」に行き着く事を目標に努力していかなければなりません。

私が全日本空手道連盟主催の第4回全日本大会で優勝した時のことです。

決勝戦の相手は、早川憲政選手でした。最初に私が足払いで攻撃したところ、逆突きで技ありを取られ、次に私が上段突きで取り返し、引き分けの状況となりました。

その後、不意なことが起こりましたが、何とも言えない静寂な世界の中で、それと何と

もいえない「厳粛」な気持ちの中で「光」に包まれその空間に漂っていました。すると、早川選手動きがスローモーションに見え、自然に体が動き、出合いの逆突きを出していました。歓声で我に返ったとき、私が勝っていたのです。

これが初めての出合いの技でした(それまで、私は出合いの技をやったことがありませんでした)。今もそのときの光景が頭に残っています。

沢庵禅師が柳生但馬守に与えた「不動智神妙録」の中に、千手観音の具体例をあげて、無心の境地を述べています。

「千手観音とて、手が千御入り候はゞ、弓を取る手に心が止らば、九百九十九の手は皆用に立ち申す間敷。一所の心を止めぬにより、手が皆用に立つなり。

観音とて身一つに千の手が何しに可有候。不動智が開け候へば、身に手が千有りても、皆用に立つと云う事を、人に示さんが為めに、作りたる容にて候」

意味／千手観音とて、手が千本おありになります。もし、弓を持つて一つの手に心がとらわれてしまえば、残りの九百九十九の手は、どれも役にたちますまい。一つの所に心を止めないからこそ、千本の手が皆、役に立つのです。

いかに観音とはいえ、どうして一つの身体に千本の手を持つておられるのかといえは、不動智を身につけることができれば、たとえ身体に千本の手があつたとしても、立派に使いこなせるのだと言う事を人々に示すために作られた姿なのです。

「不動智」と「無心」は、誘惑に乱されない正しい無意識の力の発揮した時です。

「無心」の境地に至るには、緊張感と氣を自身に取り得ることが必要となります。

空手の試合で技を出すときは、いつも「無心」に技を出していたから、勝つことができたとは私は思っています。

最後に王陽明(1472～1528)の漢詩を一つ記しましょう。

溪邊坐流水 水流心共閑
不知山月上 松影落衣斑

意味／谷川の清流に向かつて坐っていると、水は静に流れて、わが心とともにどこかである。

いつしか日が暮れて、山の端に月が昇つたのも気付かずにいたが、月の光に照らされた松の葉の影が、わが衣の上落ちて、まだらにうつっていた(流水に忘我の境を託し、山月に悟りの境地を表した歌)。